阿Q正（魯迅作品日文版） PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文
https://www.100test.com/kao_ti2020/245/2021_2022__E9_98_BF_EF_BC_B1_E6_AD_A3_E4_c105_245724.htm 第一章 序 わたしは阿Q（あキュ）の正を作ろうとしたのは一年や二年のことではなかった。けれども作ろうとしながらまた考えなおした。これをてもわたしは立言の人でないことが分る。来不朽のは不朽の人をえるもので、人は文に依ってえらる。つまり某（たれそれ）は某に靠（よ）ってえられるのであるから、次第にハッキリしなくなってくる。そうして阿Qをえることになると、思想の上に何か幽のようなものがあって末があやふやになる。 それはそうとこの一篇の朽ち易い文章を作るために、わたしはを下すが早いか、いろいろの困を感じた。第一は文章の名目であった。孔子の被仰（おっしゃ）るには「名前が正しくないとが脱する」と。これは本来めて注意すべきことで、の名前は列、自、内、外、、家、小などとずいぶん（うるさ）いほどたくさんあるが、惜しいかな皆合わない。 列としてみたらどうだろう。この一篇はいろんない人と共に正史の中に排列すべきものではない。自とすればどうだろう。わたしはして阿Qその物でない。外とすれば、内がし、また内とすれば阿Qはして神仙ではない。しからばとしたらどうだろう。阿Qは大の上に依って国史に宣付（せんぷ）して本を立てたことがまだ一度もない。——英国の正史にも博徒列というものはしていが、文豪ヂッケンスは博徒という本を出した。しかしこれは文豪のやることでわれわれのやることではない。

そのほか家という言もあるが、わたしは阿Ｑと同じ流れを汲んでいるか、どうかしらん。彼の子にお辞されたこともない。小とすればあるいはいいかもしれないが、阿Ｑはに大（たいでん）というものがない。煎じめるとこの一篇は本というべきものだが、わたしの文章の著想（ちゃくそう）からいうと文体が下卑ていて「を引いて（のり）をる人」が使う言を用いているから、そんな僭越な名目はつかえない。そこで三教九流の数に入（い）らない小家のいわゆる「休、言正」という切型の中から「正」という二字を取出して名目とした。すなわち古人が撰した法正のそれに、文字（もんじ）の上からるとはなはだらしいが、もうどうでもいい。 第二、をくには通例、しょっぱなに「何某、あざなは何、どこそこの人也」とするのが当りまえだが、わたしは阿Ｑの姓が何というか少しも知らない。一度彼は（ちょう）と名っていたようであったが、それも二日目にはあいまいになった。 それは太（だんな）の息子が秀才になったの事であった。阿Ｑはちょうど二碗の黄酒（うわんちゅ）をみ干して足踏み手振りして言った。これで彼も非常な面目を施した、というのは彼と太はもともと一家の分れで、こまかく穿（せんさく）すると、彼は秀才よりも目上だとった。このそばにいていた人は然としていささか敬意をった。ところが二日目には村役人が阿Ｑを（よ）びに来て家にれて行った。太は彼を一目るとじゅう真赤（まっか）にして怒った。「阿Ｑ！ キサマは何とぬかした。お前が乃公（おれ）の御本家か。たわけめ」 阿Ｑはっていた。 太はればるほどに障って二三前に押し出し「出目（でたらめ

）もいい加にしろ。お前のような奴が一家にあるわけがない。お前の姓はというのか」 阿Qはって身を後ろに引こうとした、太は早くもびかかって、ぴしゃりと一つ（く）れた。「お前は、どうしてという姓がわかった。どこからその姓を分けた」 阿Qは彼が姓であるを弁解もせずに、ただ手を以て左のをでながら村役人と一に退出した。外へ出るとまた村役人から一通りお小言をきいて、二百文の酒手を出して村役人におびをした。このをいた者は皆言った。阿Qはに出目な奴だ。自分で（なぐ）られるようなことを仕出かしたんだ。彼はだか何だか知れたもんじゃない。よし本当にであっても、太がここにいる以上は、そんなたわごとを言ってはけしからん。それからというものは彼の名氏（みょうじ）を持ち出す者がくなって、阿Qは遂に何姓であるか、突きとめることが出来なかった。 第三、わたしはまた、阿Qの名前をどういていいか知らない。彼が生きているは、人は皆阿 Quei と呼んだ。死んだあとではもう一人阿 Quei のをする者がないので、どうして「これを竹帛（ちくはく）に著す」ことが出来よう。「これ竹帛に著す」ことから言えば、この一篇の文章が皮切であるから、まず、第一のにぶつかるのである。わたしはつくづく考えてみると、阿 Quei は、阿桂（あくい）あるいは阿（あくい）かもしれない。もし彼に月亭（げってい）という号があってあるいは生れた月日が八月の中であったなら、それこそ阿桂にいない。しかし彼には号がない。――号があったかもしれないが、それを知っている人はい。――そうして生年月日をいた手帖などどこにも残っていないのだから、阿桂と

きめてしまうのはあんまり乱暴だ。 もしまた彼に一人の兄弟があって阿富（あふ）と名っていたら、それこそきっと阿にいない。しかし彼は全くの独り者であってみると、阿とすべき左がない。その他Queiと音する文字（もんじ）は皆（へんてこ）な意味が含まれいっそう嵌（はま）りがい。以前わたしは太の（せがれ）の茂才（もさい）先生にいてみたが、あれほど物にしい人でも遂に返答が出来なかった。しかしから言えば、秀（ちんどくしゅう）が「新青年」を行して（ロマ）字を提唱したので国が亡（ほろ）びて考えようがくなったんだ。そこでわたしの最後の手段はある同生にんで、阿Q事件の判文をべてもらうより外（ほか）はなかった。そうして一月たってようやく返辞（へんじ）が来たのをると、判文の中に阿Queiの音に近い者はしていという事だった。わたし自身としては本当にそれがいということは言えないが、もうこの上はべようがない。そこで、注音字母（ちゅうおんじぼ）では一般に解るまいと思って所（よんどころ）なく洋字を用い、英国流行の方法で彼を阿Queiと（しょ）し、更に省略して阿Qとした。これは近「新青年」に盲したことで我ながら憾に思うが、しかし茂才先生でさえ知らないものを、わたしどもに何のいい智慧が出よう？ 第四は阿Qの原籍だ。もし彼が姓であったなら、在よく用いらるる郡望（まつり）の旧例に（よ）り、郡名百家姓（ぐんめいひゃっかせい）にいてある注解通りにすればいい。「西天水（ろうせいてんすい）の人也」といえばむ。しかし惜しいかな、その姓がはなはだ信用が出来ないので、したがって原籍も定することが出来ない。

彼は未（みそう）に住んだことが多いがときどき他（たしょ）へ住むこともある。もしこれを「未の人也」といえばやはり史の法に乖（そむ）く。 わたしが分自分で慰められることは、たった一つの阿の字が非常に正であった。こればかりはこじつけやかこつけではない。がてもかなり正しいものである。その他のことになると学の低いわたしには何もかも突き止めることが出来ない。ただ一つの希望は「史癖と考好（ずき）」で有名な胡之（こてきし）先生の人等（ら）が、ひょっとすると将来多の新端（たんしょ）をね出すかもしれない。しかしそのにはもう阿Q正は消しているかもしれない。 第二章 略 阿Qは姓名も原籍も少々あいまいであった。のみならず彼の前半生の「行状」もまたあいまいであった。それというのも未の人はただ阿Qをコキ使い、ただ彼をおもちゃにして、もとより彼の「行状」などに味を持つ者がない。そして阿Q自身も身の上などしたことはない。ときたま人と喧をした、何かのはずみに目を瞠（みは）って「乃公だって以前は――てめえよりゃよッぽど豪なもんだぞ。人をなんだと思っていやがるんだえ」というくらいが一杯（せいいっぱい）だ。 阿Qは家がい。未の土祠（おいなりさま）の中に住んでいて一定のもないが、人にまれると日取（ひようとり）になって、麦をひけと言われれば麦をひき、米を（つ）けと言われれば米をき、船を漕げと言われれば船を漕ぐ。仕事が余るには、に主人の家に寝泊りして、んでしまえばすぐに出て行（ゆ）く。だから人は忙（せわ）しないには阿Qを想い出すが、それも仕事のことであって「行状」のことではしてい。いっ

たん暇になれば阿Ｑも糸瓜（へちま）もないのだから、彼の行状のことなどなおさら言い出す者がない。しかし一度こんなことがあった。あるおさんが阿Ｑをもちゃげて「お前は何をさせてもソツがいね」と言った。この、阿Ｑは臂（ひじ）を丸出しにして（支那チョッキをじかに一枚著ている）性（ぶしょう）臭いすぼらしい体で、おさんの前に立っていた。はたの者はこのを本にせず、やっぱりひやかしだと思っていたが、阿Ｑは大喜んだ。 阿Ｑはまた大己惚（うぬぼ）れがく、未の人などはてんで彼の眼中にない。ひどいことには二人の「文童（ぶんどう）」にしても、一笑のさえめていなかった。そもそも「文童」なる者は、将来秀才となる可能性があるもので、太や太（せんだんな）が居民の尊敬を受けているのは、お金がある事の外（ほか）に、いずれも文童の父であるからだ。しかし阿Ｑの精神には格の尊念が起らない。彼は想った。乃公だって（せがれ）があればもっとくなっているぞ！ 城内に度も行った彼は自然己惚れがくなっていたが、それでいながらまた城内の人をさげすんでいた。たとえばさ三尺（じゃく）幅三寸の木の板で作った腰は、未では「登（チャンテン）」といい、彼もまたそう言っているが、城内の人が「条登（デョテン）」というと、これはいだ。おかしなことだ、と彼は思っている。（たら）の煮浸（にびた）しは未では五分切の葱のを入れるのであるが、城内では葱を糸切りにして入れる。これもいだ、おかしなことだ、と彼は思っている。ところが未の人はまったくの世ずで笑うべき田者だ。彼等は城内の煮さえたことがない。 阿Ｑは「以前は豪なもん」

でが高く、そのうえ「何をさせてもソツがない」のだから、ほとんど一（いっ）ぱしの人物と言ってもいいくらいのものだが、惜しいことに、彼は体上少々欠点があった。とりわけ人に嫌らわれるのは、彼のの皮の表面にいつ出来たものかずいぶん所（いくこしょ）も（かさ）だらけの（はげ）があった。これは彼の持物であるが、彼のおもわくをるとあんまりいいものでもないらしく、彼は「（らい）」という言を嫌って一切「（らい）」に近い音（おん）までも嫌った。あとではそれを推（お）しひろめて「亮（りょう）」もいけない。「光（こう）」もいけない。その後また「（とう）」も「（しょく）」も皆いけなくなった。そういう言をちょっとでも（もら）そうものなら、それが故意であろうとかろうと、阿Qはたちまちじゅうのを真赤（まっか）にして怒り出し、相手をって、口の奴は言いかし、弱そうな奴は（なぐ）りつけた。しかしどういうものかしらん、局阿Qがやられてしまうことが多く、彼はだんだん方を更し、大抵の合は目を怒らして睨んだ。 ところがこの怒目（どもく）主を用してから、未のひま人はいよいよ附け上がって彼を嬲（なぶ）り物にした。ちょっと彼のをると彼等はわざとおッたまげて「おや、明るくなって来たよ」 阿Qはいつもの通り目を怒らして睨むと、彼等は一向平で「と思ったら、空ランプがここにある」 アハハハハハと皆は一になって笑った。阿Qは仕方なしに他ののをして「てめえは、やっぱり相手にならねえ」 このこそ、彼のの上には一高尚なる光あるがあるのだ。ふだんの斑（まだ）らとはう。だが前にも言ったとおり阿Qはがある。彼はす

ぐに犯を感づいて、もうその先きは言わない。 人（ひまじん）はまだやめないで彼をあしらっていると、遂にに打ち合いになる。阿Qは形式上かされて黄いろい子（べんつ）を引られ、壁にして四つ五つ合せを戴（ちょうだい）し、人はようやく胸をすかしてち慢（ほこ）って立去る。 阿Qはしばらくんでいたが、心の中（うち）で思った。「［＃「「」は底本では欠落］乃公はつまり子供に打たれたんだ。今の世の中は全く成っていない……」そこで彼も足しち慢（ほこ）って立去る。 阿Qは最初この事を心の中（うち）で思っていたが、遂にはいつも口へ出して言った。だから阿Qとふざける者は、彼に精神上の利法があることをほとんど皆知ってしまった。そこで今度彼の黄いろい子を引掴（ひっつか）む会が来るとその人はまず彼に言った。「阿Q、これでも子供が（おやじ）を打つのか。さあどうだ。人が畜生を打つんだぞ。自分で言え、人が畜生を打つと」 阿Qは自分の子で自分の手をられながら、を歪めて言った。「虫ケラを打つを言えばいいだろう。わしは虫ケラだ。――まだ放さないのか」 だが虫ケラと言っても人はして放さなかった。いつもの通り、ごく近くのどこかの壁に彼のを五つ六つぶっつけて、そこで初めてせいせいしてち慢（ほこ）って立去る。彼はそう思った。今度こそ阿Qは凹垂（へこた）れたと。 ところが十秒もたたないうちに阿Qも足してち慢（ほこ）って立去る。阿Qは悟った。乃公は自（みずか）らんじ自ら（いや）しむことの出来る第一の人だ。そういうことが解らない者はとして、その外の者にしては「第一」だ。状元（じょうげん）もまた第一人じゃ

ないか。「人を何だと思っていやがるんだえ」 阿Qはこういう々の妙法を以て怨を退散せしめたあとでは、いっそ愉快になって酒屋にけつけ、何杯か酒をむうちに、またの人と一通り冗を言って一通り喧をして、またち慢（ほこ）って愉快になって、土祠（おいなりさま）にり、を横にするが早いか、ぐうぐう睡（ねむ）ってしまうのである。 もしお金があれば彼は博奕（ばくち）を打ちに行（ゆ）く。一かたまりの人が地面にしゃがんでいる。阿Qはその中に割んで一番威のいい声を出している。「青四百（ちんろんすぱ）！」「よし……あける……ぞ」 堂元はを取ってじゅう汗だらけになって唱（うた）い始める。「天（てんもん）当（あた）り――隅返（すみがえ）し、人と、中（なかばり）手（はりて）し――阿Qの（ぜに）はお取上げ――」「中百文（なかばりひゃくもん）――よし百五十文（もん）ったぞ」 阿Qのはこのような吟のもとに、だんだんじゅう汗だらけの人の腰のに行ってしまう。彼は遂にやむをえず、かたまりの外（そと）へ出て、後ろの方に立って人の事で心配しているうちに、博奕（ばくち）はずんずん行してお（しま）いになる。それから彼は未らしく土祠（おいなりさま）にり、翌日は眼のふちをらしながら仕事に出る。 けれど「塞翁（さいおう）がをくしても、と（き）まったものではない」。阿Qは不幸にして一度ったが、かえってそれがためにほとんど大きな失をした。 それは未の祭のだった。その例に依って芝居があった。例に依ってたくさんの博奕（ばくちば）が舞台の左に出た。（はやし）の声などは阿Qの耳から十里の外へ去っていた。彼はただ堂元

の歌のだけいていた。彼はった。またった。は小となり、小は大洋（だやん）になり、大洋（だやん）は遂にみかさなった。彼は素ないで「天（てんもんりゃんかい）」と叫んだ。 とが何で喧を始めたんだか、サッパリ解らなかった。怒るやら殴るやら、バタバタけ出す音などがしてしばらくの眼が眩んでしまった。彼が起き上ったには博奕もければ人もかった。身中（みうち）にかなりの痛みをえてつも拳骨を食（く）い、つも蹶（けと）ばされたようであった。彼はぼんやりしながらき出して土祠（おいなりさま）に入った。がついてみると、あれほどあった彼のお金は一枚もかった。博奕にいた者はたいていこの村の者ではかった。どこへ行ってき出すにもき出しようがなかった。 まっ白なピカピカした！ しかもそれが彼の物なんだが今はい。子供に盗（と）られたことにしておけばいいが、それじゃどうもがまない。自分を虫ケラ同に思えばいいが、それじゃどうもがまない。彼は今度こそいささか失の苦痛を感じた。けれど彼は失をじて遂にちとした。彼は右手をげて自分の面（おもて）を力任せに引ッぱたいた。するとがカッとして火照（ほて）り出しかなりの痛みを感じたが、心はかえって落ち著（つ）いて来た。打ったのはまさに自分にいないが、打たれたのはもう一人の自分のようでもあった。そうこうするうちに自分が人を打ってるような持になった。――やっぱりらか火照（ほて）るにはいないが――心は十分足してち慢（ほこ）って横になった。 彼は睡ってしまった。 第三章 略 それはそうと、阿Qはいつもっていたが、名前がれ出したのは、太の御ちょうちゃくを受けてからの

ことだ。 彼は二百文の酒手（さかて）を村役人に渡してしまうと、ぷんぷん腹を立てて寝んだ。あとで思いついた。「今の世界はにならん。がを打つ……」 そこでふと太の威を想い出し、それが在自分のだと思うと我れながら嬉しくなった。彼が急に起き上って「若寡（ごけ）の墓参り」という歌を唱（うた）いながら酒屋へ行った。このこそ彼は太よりも一段うわ手の人物に成りましていたのだ。（へんてこ）なこったがそれからというものは、果してみんなが殊（こと）の外（ほか）彼を尊敬するようになった。これは阿Qとしては自分が太の父になりすましているのだから当然のことであるが、本当の（ところ）はそうでなかった。未の仕来（しきた）りでは、阿七（あしち）が阿八（はち）を打つような事があっても、あるいは李四（りし）が三（ちょうさん）を打っても、そんなことは元よりにならない。ぜひともある名の知れた人、たとえば太のような人と交があってこそ、初めて彼等の口に端（は）にるのだ。一遍口の端にれば、打っても判になるし、打たれてもそのおで判になるのだ。阿Qの思いいなどもちろんどうでもいいのだ。そのわけは？ つまり太にいのあるはずはなく、阿Qにいがあるのに、なぜみんなは殊の外彼を尊敬するようになったか？ これは棒（べらぼう）なだが、よく考えてみると、阿Qは太の本家だと言って打たれたのだから、ひょっとしてそれが本当だったら、彼を尊敬するのは至当なで、全くそれに越したことはない。でなければまた左（さ）のような意味があるかもしれない。（せいびょう）の中のお供物のように、阿Qは羊（ちょよう）と同の畜生である

が、いったん人のお手がつくと、学者先生、なかなかそれを粗末にしない。100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问 www.100test.com